

幸子 「聖夜の贈り物」

ヌコスキー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クリスマスに告白する興杏です。

pixivにも同じ作品を投稿しています。

?https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=10525165?

目次

幸子「聖夜の贈り物」

1

幸子「聖夜の贈り物」

（事務所）

幸子「おはようございます！」

輝子「おはよう…幸子ちゃん…。」

乃々「おはようございます…。」

幸子「この時期にそこ寒くないんですかお二方…？」

まゆ「まゆもいますよお。」

輝子「3人もいると…おしくらまんじゅうで暖かいぞ…。」

まゆ「幸子ちゃんも入りますか？」

乃々「さすがにこれ以上は厳しいと思いますけど…。」

幸子「遠慮しておきます。…そういえば杏さんついていますか？」

乃々「杏さんはさつききりさんに担当がれていましたけど…。」

まゆ「お昼からクリスマスのおイベントのお仕事らしいですよ。」

幸子「そうですか…おっと、そろそろレッスンに行かないといけませんね。」

輝子「なにか用事か…？私はしばらくここに居るから、伝言くらいはできるぞ…。」

幸子「ああいえ、急ぎでもないので大丈夫ですよ。」

輝子「そうか…レックスがんばってきてね…。」

幸子「もちろんです！レックスだってカンペキにこなしますよ！では行ってきますね。」パタン

輝子「…クリスマス…街をリア充たちがいつも以上に闊歩する日…。私には無縁だな…。」

乃々「でも小梅ちゃんと夜通し映画観るんですよ…？」

輝子「ん…？そうだけど…。」

乃々「それってリア充さんだと私は思うんですけど…。」

輝子「…なっ!？」

まゆ（幸子ちゃん…うまくできるかしら…？）

くレックスルームく

幸子（どのタイミングで渡しでしょうか…。お昼にお仕事ということはそれから帰ってきて…）

トレーナー「輿水！振りを間違えてるぞ！」

幸子「つつ!!すみません！」

トレーナー「お前が間違えるとは珍しいな　クリスマスだからと浮かれたか？」

友紀「へーえ？幸子ちゃんもクリスマスで浮かれるなんて可愛いところあるじゃん！」

幸子「ボクはいつもカワイイですよ！」

トレーナー「姫川はまずいつも間違つてる場所を直してから人のことを言え！」

友紀「はい。」

紗枝「いつにも増して賑やかだなあ。」

→更衣室

友紀「はー！やつと終わったあー！今日は飲むぞー！」

紗枝「しかし珍しおすなあ。幸子はんが振りを間違うなんて。何か考え事でもして

はったんどす？」

幸子「うっ……。すみません。」

紗枝「まあ、うちもうまくできひんところがあつたり、その人みたいにならないうつまで直らへん人もいはるからそんな気にせんでもいいと思えますけど。」

友紀「もー紗枝はんは厳しいんだから。」

幸子「友紀さんはいいい加減覚えてくださいよ！……では一足先に失礼しますね。」

友紀「お疲れー！……ん？幸子ちゃん！なんか忘れてるよ！」

幸子「え？あつ!!すみません、ありがとうございます。」

友紀「今日の幸子ちゃんいつもよりそっかしくない？」

幸子「まるで普段もそっかしいみたい言わないでくださいよ！」

紗枝「でも氣い付けはってな？よそ見して怪我でもしたらあきまへんえ？」

幸子「大丈夫ですよ！では今度こそ失礼します！」

友紀「…さっきのつてクリスマスプレゼントかな？手に収まるくらい小さい箱だったけどなんなんだろ？」

紗枝「佩び物どすやろか？」

友紀「オビモノ？」

紗枝「あくせさりーのことどす。」

友紀「へー！でもプレゼント用意してることとはクリスマス会でもするのかな？」

紗枝「どうどすやろか？」

く廊下く

幸子（ボクとしたことがレッスンにまで支障をきたしてしまおうとは…。しつかりしないとー）

ボスツ

幸子「へぶっ!？」

きらり「きゃっ！ごめんにい幸子ちゃん！ケガしてない？」

幸子「大丈夫です！すみません、よそ見してたみたいで…そちらこそ大丈夫ですか？」

きらり「きらりは平気だよお☆ケガしてなくてよかったあ〜！」

幸子「そういえばお仕事はもう終わったんですか？」

きらり「うん！これからクリスマスパーティーの飾り付けをするんだにい！幸子ちゃんも明日来る??」

幸子「そうですね…。その日はオフなので参加しましょうかね。」

きらり「おつけー☆そうそう！プレゼント交換もするから用意しておいてほしいにい☆」

幸子「わかりました！ボクが最高にカワイイプレゼントを用意しますよ！」

きらり「うんうん！それじゃまったにい☆」

幸子「はい！また後で…。…きらりさんがいるということは杏さんももういるってことですかね。」

〈事務所〉

幸子「カワイイボクが戻ってきましたよ！」ガチャ

輝子「あ、お帰り…幸子ちゃん…。」

杏「グデエ

輝子「杏さんは見ての通りだ…。」

幸子「これは…しっかりとエネルギー切れですね。起きるまで宿題でも進めましょうかね。」

輝子「もう宿題やるなんて偉いな…。私なんて開いてすらないぞ…。」

幸子「ボクは計画的ですから！というか輝子さんは溜めすぎて地獄を見るんですから、もつと計画的に消化していかないダメですよ？」

輝子「うっ…が、頑張る…。…お、もうこんな時間か…。そろそろレッスンだ…行こつか…。」

小梅「うん…。ニユ

幸子「小梅さんもいたんですか。お疲れ様です。」

小梅「お疲れ様…。ほんとは後ろからびつくりさせたか…叫び声で杏さんが起きちやうかもしれないと思ったから…。」

幸子「そもそも驚かさないうでくださいよ！全く…。レッスン頑張ってください！」

輝子「ああ…。」

小梅「うん…じゃあね…。」バタン

幸子（…まだ起きませんかね。）

幸子「…」ジーツ

杏「…」

杏（な…なんなんだ？目が覚めたらなんか幸子にガン見されてる…。なんか杏が起きるの待ってるっぽいし…。寝たふりなのは気づかれてないっぽいししばらく様子見して…）

幸子「…」スツ コツ コツ コツ…

杏「…ふう。なんであんなに見てきたんだろ。なんか怒らせるようなことしたかな…。心当たりはまあ色々あるけど…。」

まゆ「幸子ちゃんは杏ちゃんに用事があるみたいですよ？」

杏「うおあ!?!…まゆもいたんだ。」

まゆ「うふふ…。幸子ちゃんは怒ってるわけじゃないと思いますよ？でも、お話はちゃんと聞いてあげて下さいね？」

杏「…てか知ってるならちよつとその内容教えてくれたりは…」

まゆ「知らないですよ？」

杏「えっ？」

まゆ「勘ですよ？ただ、まゆがそうだから幸子ちゃんもきつとそうだろうなって思っただけです。」

杏「んー…？ますますわからないんだけど。」

まゆ「うふふ…。それじゃお先に失礼しますね。」

杏「あつちよつと…行つちやつた。」

杏（意味深なこと言われてもなあ…ん？なんだろあれ…プレゼント？もしかして…）
（まゆ『幸子ちゃんは杏ちゃんに用事があるみたいですよお？』）

杏（…杏に？でも置き書きしておけばいいだろうし…）

（まゆ『お話はちゃんと聞いてあげて下さいね？』）

杏（…もしかしてそういう？いやいやないない！……仮にあつたとしたら袋の中の箱の大きさに…）

杏「…まさか、ね。」

……コツ コツ コツ

杏「…もしそうだとしても、ここじや雰囲気も足りないよまったく。」ガチャ

幸子「あつ！杏さ…」

杏「あくよく寝た。外の空気でも吸つてこようかな。」

幸子「あつちよつと！……無視することないじゃないですかもう。…外の空気つてことは屋上ですかね？」

く屋上く

杏（ちよつと強引だったかな？）

幸子「杏さん!!」

杏「……おお、幸子じゃん。」

幸子「とぼけないでくださいよ！さつき気づいてたじゃないですか絶対！」

杏「はは、やっぱりバレてた？」

幸子「もう……。」

杏「……それで、さつき杏をずっと見てた理由、教えてよ。」

幸子「ずっと見てたって……起きてたんですか!？」

杏「途中からね。でもあんなに見られてたら何かしたかなって思っちゃうじゃん。」

幸子「むう……。」

杏「で、どうしてなの？」

幸子「……これですっ！クリスマスですから！」

杏「ん、ありがと。……開けていいの？」

幸子「……はい。」

杏「……この箱……指輪？」

幸子「あなたにつけて欲しいと思ったんです。カワイイボクの選んだものを……」

「……大好きなあなたに。杏さん、ボクと付き合ってください。」

杏「……3つ。」

幸子「へ？」

杏「3つ言わせて。」

幸子「はい…。」

杏「まず1つ目。プレゼントのチョイスが重い！」

幸子「…はい？」

杏「指輪で!!結婚前提!?!急にその重さ渡されても杏は受けきれないよ!?!」

幸子「…」

杏「2つ目。場所にロマンチックさが足りない！」

幸子「…杏さんからロマンチックなんて言葉が出てくるなんて…。」

杏「杏だって花も恥じらう17歳!流石に告白シーンにくらい夢だつて見るよ!それに他の部屋には人いるのにもしも来られたらどうするのさ!」

幸子「それは…。」

杏「…ラスト3つ目。ちよつと近くに来て。」

幸子「？」

杏「…これからもよろしくつてことで。」

幸子「?!?!」

杏「杏だつてこういうことするキャラじゃないんだから意味くらいわかつてよ?それ

に……まあ……一応初めて、だし……」

幸子「……」ポカーン

杏「いつまで上の空してんのさ！」ベシイ

幸子「ハッ！……いえ、杏さんから来るとは思ってもいなかったの……」

杏「ああもう！やっぱ杏のキャラじゃない!!このムード終わり!!……そうだ。明日オ

フでしょ？クリスマスパーティーのプレゼント見繕ってよ。」

幸子「それってつまりデ……」

杏「だああああ！さりげなく言ってるのを！察して!!」

幸子「……ぶふっ。」

杏「わーらーうーなー!!」

幸子「いえ……あなたが好きで本当に良かったと思っただけです。」

杏「……むう。」

幸子「杏さん。」

杏「……なにさ。」

幸子「メリークリスマス、明日もよろしくお願いします。」

杏「……メリクリ。」

（翌日）

幸子「……」

杏「やつほー幸子。」

幸子「遅いですよ!!そちらから時間指定したのに30分もボクを待たせるなんて!」

杏「ごめんごめん。」

幸子「全く…。ちゃんとボクをエスコートしてくださいね?」

杏「わかったよう…。」

幸子「♪」

杏（こりやまた上機嫌なこと。）

幸子「それにするんですか?」

杏「パーティーのプレゼントなんて安っちい面白グッズで十分でしょ。」

幸子「まあ杏さんらしいといえましょうかね。」

杏「まるで杏が安い女みたいに言ってくれるじゃない。」

幸子「そうは言ってませんよ!」

杏「どうかねえ。幸子は随分しっかりしたもの買うじゃん。」

幸子「貰って嬉しいものの方がいいじゃないですか!カワイイボクの写真でも良かったんですがそれだと貰って一目で誰のものかわかってしまつて面白みに欠けるといふものですか!」

杏「うわー貰って一番困るやつじゃん。」

幸子「ボクの写真が困るものだって言うんですか!？」

杏「はっはっは。」

幸子「パーティーまでまだ時間がありますね。」

杏「お昼から動いて疲れたから一眠りするよ。」

幸子「ええ!?!もつと色々なところ寄つたりしないんですか!？」

杏「本来クリスマスは家でまつたり過ごす日なんだし妥当でしょ?」

幸子「むう…。」

杏「ああそうそう、はいこれ。」

幸子「…?」

杏「…:幸子はまだ若いんだからお金の使い方考えなよ?」

幸子「この箱…もしかして今日遅れたのって…」

杏「それ以上の発言は杏の特権で禁止です。」

幸子「…もう、素直じゃないんですから!」

杏「あ、言つとくけど指にははめないからね昨日の指輪。杏がアクセサリーなんてつけてたら何事かと思われちゃうし。流石に他のみんなにはバラさないからね?」

幸子「まあそこはしょうがないですね。」

杏（まあ幸子がわかりやすいから遅かれ早かれ気付かれるんだろうけど。現に1人知ってるし。）

幸子「…何か失礼なこと考えてませんか？」

杏「別にいい？」

幸子「絶対考えてましたよね!? 誤魔化す発言が露骨すぎますよ!」

杏「幸子ほどじゃないけどなあ。」

幸子「どういう意味ですかそれ!!」

杏「まあまあいいじゃんなんだって。それじゃまた後でね。」

幸子「ちよつと! せめて事務所までくらい送り届けてくださいよ!!…全く、あの人らしいとはいえない仕方ないですね♪」

く一方、事務所く

輝子「なんだかまゆさん上機嫌だな…。いいことあった…?」

まゆ「うふふ…。どうでしょうね。」

輝子「…?」

おわり